「ヤヲラ」と「ヤハリ」

来田　隆

目　次

一、はじめに
二、「ヤヲラ」の語形と意味
　1、「ヤヲラ」の語形変化
　2、「ヤヲラ」の意味
三、「ヤハリ」の語形と意味
四、「ヤヲラ」から「ヤハリ」へ
五、「ヤハリ」の意味変化
六、おわりに

一、はじめに

現代語の副詞「ヤハリ」の語源について、ヤヲラ・ヤワラの転とする考え方は早くからある。早くに『志不可起』（享保十二〈一七二七〉年）に、

「ヤハリ、ソノママト云ニ用ル詞也。源氏ナドニやをらト云詞有。シヅカニヤハラカナル也。和ノ字ヲ用」（『国語学

大系　方言一』）

と説いている。この考え方は後の研究者にも受け継がれ、新村出氏は「足利時代の言語に就いて」の中で、

今日「やつぱり」とか「よつぽど」とか云ふ言葉がある。さう云ふ俗語に就ては未だ今まで語学者で充分な解釈を施した人は無い様です。併ながら史記抄等の抄本に依つて「やつぱり」とか「よつぽど」とか云ふ言葉を解釈して見ますと其由来が能く分かるのである。「やつぱり」と云ふ言葉は「静に」「其まゝ」と云ふ意味で使つてある。之を促音にしないで「やはり」或は「やわり」と云ふ風に使つてある所もあります。是は特別に調べ上げたものがございますから詳細は別に申さうと思ひます。「やつぱり」或は「やはり」と云ふ言葉は、多分平安朝の「やはら」「やをら」（「やほら」の転）と云ふ語に関係を有つて居るらしい。（『東方言語史叢考』所収　昭和2・12）

と説かれている。そして両者には意味の上で差異のあることについて、

（ヤヲラは＝筆者注）平安朝にては「そつと」とか「徐に」とか云ふ意味で、動作を極静粛に振舞ふことに使つた。即ち宇津保物語に「大将みはしらよりやをらのぼりて」源氏物語に「姫君御硯をやをら引寄せて」今昔に「やはらあゆみよりたるに」と云ふ風に動作が極めて静粛な場合に使つてある。所が（ヤハリは＝筆者注）史記抄には此静粛の動作が全く静止の情態の意味に変じて居る。動作の徐々なこと即ち緩慢な動作の意味にしないで、依然として静止して居る意味に使つてある。（前掲書）

と説いておられる。これを承けて、湯沢幸吉郎氏は『室町時代言語の研究』に於いて、『史記抄』からヤハリ・ヤツパリの例を引かれ、

これは既に先輩が論じた通り、平安朝の文学に「やはら」と現れる語で、現代口語では、多少意味は変わったが、「矢張」の漢字で表記して居る副詞である。（244ペ）

と説かれ、さらに『四河入海』からヤホリ・ヤツホリの例を引かれ、「これは、「やをら」の転なるべく、発音はヤオリ、

ヤツポリかと言われる」と述べられた。

ところで、「ヤヲラ」と「ヤハリ」との関係を指摘された新村氏は、「是は特別に調べ上げたものがございますから、詳細は別に申さうと思ひます」と述べられながら、何故かそれを公表されていないようである。両者の関連性を説くためには、意味の面だけではなく、音声の変化として、〈ヤヲラ〉または〈ヤワラ〉（音形の表記には＜ ＞を付す。以下同じ）から〈ヤハリ〉への変化が説明されなければならない。そこで本稿は、「ヤヲラ」と「ヤハリ」の関連性について、意味と形態との両面から改めて考えようとするものである。

二、「ヤヲラ」の語形と意味

1、「ヤヲラ」の語形変化

「ヤヲラ」は、文献資料にはヤヲラ・ヤハラ・ヤワラという形で現れる（以下、語形を考慮しない場合は「ヤヲラ」表記で代表する）のであるが、これらの語形を通時的に考察したものとしては早くに佐藤武義氏の論がある。[1] 氏は、平安時代から室町時代までの文献を広く調査され、平安朝の和文からヤヲラが見られること、ヤハラ（ヤワラ）は十一世紀後半頃に見られるようになることを指摘され、また、『日葡辞書』にはヤワラは登載するがヤヲラは登載していないことから、十七世紀前後はヤワラが一般的であったが、ヘボンの『和英語林集成』（初版）になるとヤヲラしか登載されていないので、そのころにはヤヲラが復活していたと説かれている。

文献資料ではヤヲラが早くに現れ、ヤハラまたはヤワラが遅れて出てくることは佐藤氏の指摘の通りである。ただ、『日葡辞書』にヤヲラがなぜ登載されていないのかは考えるべき問題である。氏も指摘しておられるように、室町時代に於いても短編ではヤヲラとヤハラとの両形が見られること、また『和英語林集成』も第3版（明治十九年刊）にはヤヲラとともにヤワラも登載されていることは確認しておきたい。

YAORA　ヤヲラ　adv. Softly, quietly, gently:— *mi wo okosu*, softly raised himself up ; —*dakiokosu*, to raise up gently, Syn, SOTTO.

YAWARA　ヤワラ　adv. Slowly, softly, gently (same as *yaora*)

まずは平安時代から室町時代までの文献に見られる「ヤヲラ」の意味・用法について、改めて検討することとする。(2)

2、「ヤヲラ」の意味

ヤヲラとヤハラ（ヤワラ）とは意味が異なるように説かれることもあるが、(3) 両者に意味上の差異は無いと考えられる。例えば、既に指摘されているように、『源氏物語』の大成本文には「やをら」が五三例見られるが、そのうちの八例は「やはら」の異文を有する。このようなことは他の文献に於いても指摘できる。『古本説話集』の

○腰にさしたる刀をやをら抜きて（228・8）

○やをら歩み寄りたるに（185・1）

は、同一の説話を収める『宇治拾遺集』では、それぞれ、

○腰の刀をやはらぬきて（204・4）

○やはら、歩みよりたるに（227・16）

となっている。ヤヲラとヤハラ（ヤワラ）とに意味上の差異は認められないので、以下には一括して取り扱う。

「ヤヲラ」の用例の殆どは、i《動作を徐々に、静粛に行うさま》の意を表すものである。

○ザウシニイキテ、心地ノイミジクアシケレバ、ヤヲラフシヌ。（『打聞集』39・5）

○頸をもたげて、をきむとしければ、やをら手をかけてをこし立てつ。（『古本説話集』194・3）

○「あはれ」とやおぼしけむ、やをら山からをりきて、牛屋のうちに倚り臥しぬ。（同右　268・8）

○みやひやかにもてなして、やをらきぬひきかつきて、ふしたるけはひ、いひしらすなよやかにみやひやかなり。（『土井本太平記』一八49オ）

○チトマドロミタリケルヒマニ、ヤワラ舟ノハタニ立給タレバ（『延慶本平家物語』下284・4）

○ヤワラ共縄ヲトキテ漕出ムトスルニ（同右　上240・7）

○火のほのぐらい方へ向うて、やわらこの刀を抜き出いて鬢にひきあてられたれば、よそからはただ氷やなどのやうに見えた。（『天草版平家物語』5・4）

右の他に、用例は少ないが、

○「この馬、京に率て行きたらんに、見知り人ありて、『盗みたるか』など言はれんもよしなし。やをらこれを売りてばや」と思ひて、（『古本説話集』195・7、『宇治拾遺集』「やはら、これを売りてばや」232・1）

○その契りをふかくして、京にのぼりにけり。世中のすさまじきまゝには、やをら唐にや渡りなましと思ひけれども（『宇治拾遺集』407・16）

のような例もある。これらは、iの意から転じてii《他人に意図を知られないようにことを行うさま》を表している。

さらに、用例は一層少ないが、

○やをらつゝひきいり給ぬるけしきなれば、（『源氏物語』薄雲　629・5）

○女房どもえ咲はで、やはらづゝひき入りにけり。（『古本説話集』29・2）

○無量ノ功徳ヲ得ト云ハ。初心カラ。ヤワラツヽセハ。ヤウ〳〵ツヽモ。トツクヘケレトモ。勇猛ノ心ヲ起ス位ニ。諸位ノ功徳ヲモ。貫テ得タル也。（『解脱門義聴集記』50・4）

のように、iii《「ヤヲラヅツ」の形で用い、程度がわずかであるさま》を表す例もある。

「ヤヲラ」は《動作を徐々に、静粛に行うさま》を表す情態副詞であり、転じては《他人に意図を知られないようにこ

とを行うさま』も表し、また、程度副詞的に用いられることもあった。そして、ヤヲラからヤハラあるいはヤワラへと語形変化をしても、『日葡辞書』（邦訳）に、

Yauara. ヤワラ（やはら）副詞。ゆっくりと、または、やんわりと。例、*Yauara catanano nuqi idasu.*（やはら刀を抜き出だす）刀をゆっくりと引き抜く。¶ *Yauarayauara*（やはらやはら）同上。

と解説されているように、その意味は変化することはなかったと考えられるのである。

三、「ヤハリ」の語形と意味

「ヤハリ」は室町時代の文献から見られる。キリシタン資料（『天草版平家物語』『エソポのハブラス』『金句集』『どちりなきりしたん』『こんてむつすむん地』）や虎明本狂言には見られないのであるが、抄物には前期のものから用例が存する。「ヤハリ」の見られる抄物で管見に入ったのは次の資料である。[4] それぞれの資料での「ヤハリ」の語形と用例数は次の通りである（年代は成立あるいは刊行年の概略を示したもの）。

『百丈清規抄』（一四六二）	ヤハリ	一例
『史料本人天眼目抄』（～一四六四）	ヤワリ	一例
『碧巌集抄〈川僧抄〉』（～一四六九）	ヤツハシ	一例
『史記抄』（一四七七）	ヤハリ	五例
『土井本周易抄』（一四七七）[5]	ヤハリ	三例
『京大本湯山聯句抄』（一五〇四）	ヤホリ	一例
『四河入海』（一五二七）[6]	ヤホリ	二〇例
『玉塵』（一五三六）[7]	ヤツハリ	一例
	ヤツハリ	二例
	ヤヲリ	二例
	ヤツホリ	二例
	ヤホシ	一例

『東大国語研究室蔵本医方大成論抄』（一五七九）　ヤツハリ　二例
『京大本周易抄』（〜一五九一）　ヤツハリ　一〇例
『禅林類聚撮要抄〈伝万安抄〉』（一六四二刊）　ヤワリ　六例
『碧巌集鈔〈伝万安抄〉』（一六五〇刊）　ヤワリ　五例
『無刊記碧岩鈔』　ヤヲリ　三例

抄物に於ける「ヤハリ」の語形は、ヤハリ・ヤツハリ・ヤツハシ（これをa〈ヤハリ系〉とする）、ヤホリ・ヤツホリ・ヤホリ（これをb〈ヤホリ〉系とする）、cヤワリ、dヤヲリと多彩である（本稿では個々の語形を考慮しない場合は「ヤハリ」の表記で代表させる）。

まず意味の面から見ると、語形の違いにかかわらず意味は同じである。すなわち、いずれの語形であっても、「(て)居る」あるいは「置く」という二つの動詞を修飾する用法が殆どを占めている。

ヤハリ・ヤツハリ・ヤツハシから見てゆく。

i「(て)居る」を修飾する。この用法が最も多い。

○鳥ノ飛時、チツトモヤハリイハ、可落ソ（『百丈清規抄』四2オ13）
○静ニヤハリイバヨイゾ（『土井本周易抄』三22オ）
○他人ヲ雇テ銭ヲ出テ我ハヤハリ居ルヲ居更ト云ソ（『史記抄』一七13ウ）
○歴ハ星ノ天ヲアチコチヘマワラルヽソ、一一所ニヤハリハイヌソ（『玉塵』三九5オ）
○初九ノモノハ先ツヤツハリ居ヨゾ（『土井本周易抄』三22オ）
○六二　左股カ破レテヱアルカヌソ、ヤツハリイタカヨイ（『京大本周易抄』38ウ）
○山ハ動テヤツハリイル物ヂヤ程ニ止ルトモ止ムトモヨムソ（同右　54オ）

○ヤ〈ツ〉ハシ引キコウテ居タラハ此僧モ天下ノ人モ恁麼トモ窺イ得マシイ者ヲトサワツタ（『碧巌集抄〈川僧抄〉』44ウ「ツ」は右傍補入）[8]

ii「（て）置く」を修飾する。

○ヤハリヲカバナヲラウソ（『土井本周易抄』三21ウ）

○銭ヲ多ニセウト思ワハチツトモヤハリ置テハカナウマイソ（『史記抄』一九9ウ）

○瑟ヲヒク時ハ絲ヲモチアクル柱（コトヂ）ヲアチヘヤリコチヘヤリテコソヨケレ、膠ヅケノヤウニハハタカイテハナニカヨカラウソ。一度音カヨケレハトテ、ヤツハリヲイテハワルカラウソ（同右　一一29オ）[9]

iiiその他の動詞の場合は次の一例のみである。

○ヤツハリ動カイデヨカラウゾ（『土井本周易抄』四5ウ）

i「（て）居る」を修飾する「ヤハリ」は、すべて「もとの状態のままで動かないでいるさま」を表し、ii「置く」の場合は「もとの状態のままにしておくさま」を表している。「ヤハリ」は《もとの状態のままであるさま》を表す副詞である。鈴木博氏によると、次に掲げる『医方大成論抄』東大本のヤツハリは、東大本と兄弟関係にある京大本では「ソノマヽ」（64オ）となっている由[10]であり、「ヤハリ」の意味をよく示す例である。

○爰ハ夕部ノ食ガヤツハリ不消テ居故ニ、宿食ト云也（74オ9）

ヤホリ・ヤツホリ・ヤホシも、被修飾語の実態はヤハリ系と全く異なるところがない。

i「（て）居る」を修飾する。

○一云農…ツクリウトノ農人ハ冬ハ五穀ヲトリ収テヤホリ静ニヲルソ（『四河入海』六ノ三2ウ）

○一云家――出仕―坡言ハ家ニヤホリ居レハ妻子ヲスコスヘキ用カナイソ（同右　一九ノ四82ウ）

○是ヨリ遠国エ推擠スルニ推擠スレトモ不去ヤコヽニヤツホリ三年居ソ（同右　五ノ三16ウ）

○一云終日ヤツホリ閑ニ居テ坐〆閉門――〆（同右　一六ノ一17ウ）
○一云…チツトヤホシイウトスレハ、旅人カソシル程ニヤスウモエネヌソ（同右　八ノ二43ウ）

ii「置く」を修飾する。

○一云…秋冬ハ花ノ休息スル時ソ、…チツトモ牡丹ヲヤホリヲカシトテサカスルケナソ（『四河入海』一四ノ一16ウ）

ヤヲリ・ヤワリも被修飾語は右と同様である。

i「（て）居る」を修飾する。

○只ヤヲリ被レ居タラハ天下ノ人ハ雪峯ヲモ何ニトモエセマイ物ヲト也（『無刊記碧岩鈔』六3オ）
○師云機ハ枢機チツトモヤワリワイヌソ、ハタラカテワカナワヌソ（『人天眼目抄』64）
○是カ不レ丈夫處也、ヤワリ嶺南ノ樵夫テ居ラレタラハ好ンソト也（『禅林類聚撮要抄』二25ウ6）

ii「置く」を修飾する。

○似則―ヲウ似ハ似タレトモ雲門ノ其レテヤヲリヲコウニコソ（『無刊記碧岩鈔』六25オ）
○侍者ヲ三喚テ抑逼〆何ニセンソ、ヤワリ置カイテ其儘コソ見事ナレトソ（『禅林類聚撮要抄』二36オ6）
○其儘テヤワリヲカイデトナリ（『碧巌集鈔』一63ウ）

iiiその他は次の一例のみである。意味はiiの場合と同じである。

○向レ双林寄レ此身粥飯喫〆ヤワリ時日ヲ過サイテ不レ入事ヲ〆注却ヲ下〆揮案―スルカ惹埃―タ事ソト也（『碧巌集鈔』七36ウ）

以上の如く、抄物に見られる「ヤハリ」は語形の違いにかかわらず、いずれも「（て）居る」「置く」を修飾して、《もとのままの状態であるさま》を表している。抄物の「ヤハリ」の意味は、「ヤヲラ」の《動作を徐々に、静粛に行うさま》とは異なっている。けれども、「緩慢な動作」の徹底は「動作の静止」につながろうから、意味変化としては不自然では

なく、「ヤハリ」の語源を「ヤヲラ」に求める障害にはならない。問題は、「ヤヲラ」から「ヤハリ」への語形変化の道筋の説明にあることになる。

四、「ヤヲラ」から「ヤハリ」へ

ヤハリ・ヤツハリ・ヤツハシは、現代語の語形と同じく〈ヤハリ・ヤッパリ・ヤッパシ〉と発音されていたと考えられる。『土井本周易抄』に、

○ヤツバリ不動ヲラバヨイゾ（四5ウ）

とあって、この濁点は鈴木氏の説かれる如く（前掲書）、半濁音の表記に用いたものであろう。そう考えると、これと平行する形であるヤホリ・ヤツホリ・ヤホシも〈ヤホリ・ヤッポリ・ヤホシ〉と発音されていたと見るのが自然である。

ヤホリとヤヲリとの関係は微妙である。『湯山聯句抄』では伝本によって次のような異同がある。

○ヤホリイル商ナレトモ、ウリカウテ播磨国ヘモヤリツトツヽシ、摂州ノ物ヲ、サヤウニズルソ（68オ9　霊雲院本「ヤホリ」・寛永版本「ヤヲリ」）

○漢張良カ籌ヲ運ニ帷幄中ニ勝コトヲ決ニ千里外ニト云テ、ヤヲリ、マクウチマワス処ニイテ、ケイリヤクヲ、チヤツ〳〵トシテ、弓矢ヲトラセタソ（59ウ6　霊雲院本・版本とも「ヤヲリ」）

○占ヒ閑ヲシメ得テ、心ノ儘ニカワリヲルハ、閑ヲ多持テ、大名ナルホトニ、北阮ノ賊宝多クモツト同事ソ（9ウ12　霊雲院本「ヤヲリ」・版本「カワリ」）

第二例は三伝本ともにヤヲリとあることを考慮するならば、第一例のヤホリも仮名遣いの問題であって、発音は〈ヤヲリ〉であった可能性もある。最後の例のカワリは霊雲院本の語形を尊重してヤヲリと誤写として取り扱うが、ヤワリの誤写の可能性を否定するものではない。

さて、「ヤハリ」の諸形を出現順に見るならば、最も早い例は『百丈清規抄』のヤハリである。江戸初期刊の抄物では、『禅林類聚撮要抄』『碧巌集抄』はヤワリ専用であり、『無刊記碧岩鈔』ではヤヲリ専用となっている。そして、ヤホリ・ヤツホリ・ヤホシは『四河入海』の「一云」と『湯山聯句抄』とであって、いずれも一韓の抄に限って見られる形である。このような実態から、〈ヤハリ・ヤッパリ・ヤッパシ〉が先行し、これから〈ヤホリ・ヤッポリ・ヤホシ〉が派生し、さらに〈ヤハリ〉〈ヤホリ〉から〈ヤワリ〉〈ヤヲリ〉が派生したと見ることもできる。

さて、「ヤヲラ」と「ヤハリ」との関係であるが、「ヤヲラ」の方は『日葡辞書』に登載されている形からしてヤワラが室町時代の一般形であったとするならば、〈ヤハリ〉は〈ヤワラ〉の直接の変化形であるということになる。しかし、これを音声変化として合理的に説明することは容易ではない。とすれば、右に述べたaヤハリ・ヤツハリ・ヤツハシ、bヤホリ・ヤツホリ・ヤホシ、cヤワリ、dヤヲリの諸形の派生関係の捉えかたに問題があることになる。すなわち、「ヤハリ」のもとの形は何であったかである。

結論を先に述べるならば、「ヤハリ」のもとの形はヤワリであったのではないかということである。ヤワリは早くに『史料本人天眼目抄』に見られる。江戸期の伝万安の抄ではヤワリ専用となっているのであるが、敬語「ヲスナル」を使用することから知られるように、伝万安の抄物のことばには古態性が認められるのである。[11]『史料本人天眼目抄』は書写は江戸期であるが、そのヤワリも原本の形を伝えるものと考えることも出来る。ヤヲリも『湯山聯句抄』にすでにその用例がある。このようなことから、cヤワリあるいはdヤヲリがa〈ヤハリ系〉b〈ヤホリ系〉に先行する形であったと見うるのである。すなわち、「ヤハリ」のもとの形はヤワリであり、これがヤワラの直接的な変化形であると考えるのである。

このように考えるとき、次には〈ヤワリ〉から〈ヤハリ〉への変化が合理的に説明されなくてはならないが、それは次のように考えられる。すなわち、〈ヤワリ〉から直ちに〈ヤハリ〉へと変化したのではなく、〈ヤワリ〉はまず〈ヤッ

パリ〉へと変化した（ヤツハシは早くに『碧巌集抄〈川僧抄〉』に見られる）。そして、その〈ヤッパリ〉から〈ヤハリ〉が生まれたと考えるのである。〈ヤワリ〉から〈ヤッパリ〉への変化は〈アワレ〉から〈アッパレ〉を派生することなどからの類推であり、そして、〈ヤッパリ〉から〈ヤハリ〉への変化は、例えば〈アサッパラ（朝腹）〉が〈アサハラ〉の変化形であるという事実に基づく、いわば誤れる回帰であったと考えることができる。

狭い調査の範囲内での仮説ではあるが、「ヤハリ」の諸形の派生関係をこのように捉えることによって、「ヤヲラ」と「ヤハリ」との関連性を語形の上からも説明できる。《動作を徐々に、静粛にするさま》を表す「ヤヲラ」は、《もとのままの状態であるさま》を表す意を派生したが、みずからはもとの意味を保ち続け、新しい意味は「ヤハリ」に担わせたのである。

cヤワリからa〈ヤハリ系〉への変化とdヤヲリからb〈ヤホリ系〉への変化のいずれが先であったかについては不明としなければならない。けれども、「ヤハリ」が成立した時代はヤワラとヤヲラの両形が併存していたのであるから、そのいずれであっても問題はない。

すでに述べたように、「ヤハリ」は室町時代に於いてもキリシタン資料には見いだし難いのであるが、それは「ヤハリ」が極めて俗なことばであったということが考えられる。明治一九年刊の『和英語林集成』（3版）にはヤハリが登載されていて、次のように解説されている。

YAHARI ヤハリ 仍 adv. (coll.) Still yet, also, too, likewise: —*moto no tōri*, still the same as it was. Syn. NAO.

ここに「俗語」という注記があることが注意される。

五、「ヤハリ」の意味変化

室町時代の「ヤハリ」は、《もとの状態のままであるさま》を表す副詞であった。これは、現代の「ヤハリ」とは意味が異なっている。現代語の「ヤハリ」は、例えば『明解国語辞典』で、

①（何かしてみたものの）結果が以前（他の場合）と同じであることを表す。

②違うことが一応は期待されたが、結果的には普通に予測される通りであったことを表す。

③期待される所を裏切らないことを表す。

と解説されているように、話し手の主観を表す副詞である。室町時代に於いて客観的な状態を表す副詞であったものから話し手の主観を表す副詞へと意味を転換させているのであるが、この意味の転換がいつごろ生じたかについて最後に触れておきたい。

江戸時代を四期に分けるならば、第一期（明暦頃まで〈一六〇三～一六五八〉・第二期（寛文から享保頃まで〈一六六一～一七三六〉）に於ける「ヤハリ」の意味は室町時代と変わるところが無い。『かたこと』（慶安三〈一六五〇〉年）には、

○其儘そこにあれと云べきを。やつぱり。やはり。やつぱしなどいふは如何。此うちにもやはりといふこと葉は若矢張の字歟。弓に矢を引くはへて。むかふ敵を射すまさんと心にくすみて待まふけたるやうのこと歟。(663)

とあり、また、本稿の「はじめに」に掲げたように、『志不可起』では「ソノマヽト云ニ用ル詞也」と説いている。この期の用例を掲げる（なお、以下の用例には、底本のルビは省略した）。

○一　毎日〳〵。やはり。もちつかれけるとなり。との餅を。みな〳〵。なが局のつぼねごとへ。くばられける。

（『おきく物語』7ウ6）

○物もふ。ぐつろ左殿。うちにござるか。何とはや見物にござつた。やれ〳〵。ぐつろ殿と。同道せねば。みども

のなぐさみがない。やあ。みどもにあふて。笠をとらせらるゝはどなたじや。やはりめせ。こなたは祭は見物なされぬか。（『続狂言記』元禄一三〈一七〇〇〉年　見物左衛門　二12オ15）

○簾を上げて「コレおはつじやないか。これはどうじや」と編笠を。脱がんとすれば「アヽまづやはり着てゐさんせ。けふはゐなかの客で。三十三番の観音様をめぐりまし。こゝで晩まで日暮しに。酒にするじやとぜい言ひて。物真似聞きにそれそこへ。戻つて見ればむつかしい。駕籠もみな知らんした衆。やつぱり笠を着てゐさんせ。…」（『曾根崎心中』元禄一六〈一七〇三〉年　『新古典大系』上109・9）

○また四五町すぎて、右の男に行合ひ、「さて〳〵、その方によく似たる者有て、只今面目を失ふた」と語る。かの男聞て、「これはさて、やはり右の者にて候」といふ。（『軽口御前男』元禄一六〈一七〇三〉年　岩波文庫『元禄期軽口本集』199）

○「…けふもけふとて此子がの。うみの母はなきともしらず。やつぱり此葛の葉を。実の親と思ふて心よふあそべども。乳をさぐつてかゝさまなふと。泣が悲しい〳〵」とわつと計にふししづむ。（竹田出雲『芦屋道満大内鑑』享保九〈一七三四〉年　『新古典大系』106・8）

『おきく物語』は元和八〈一六二二〉年、大坂城落城の際に、城中にあった菊という二十歳の女性の体験を記したもので、一七世紀末の成立かとされるものである。この「ヤハリ」は「相も変わらず餅をついていた」というのである。『続狂言記』の例は、「笠を取らないでそのままで」の意である。『曾根崎心中』の例は、「笠をそのまま着ていなさい」の意である。『軽口御前男』の例は、ある侍が知人に会って、「作左衛門さん。久しぶり」と声を掛けたところ、別人であった。しばらく歩いて、また同じ男に出会って、侍が「さっきあなたによく似た人に会って、恥をかきました」と言ったのに対して、「さっきのと同じ男です」と答えているのである。『芦屋道満大内鑑』の例は、生みの母親はもはや亡くなっていることも知らず、葛の葉を依然として実の親と思い込んでいるというのである。室町時代の抄物に於いて見られ

たような被修飾語の固定性は見られないが、意味はいずれも室町時代と変わらない。

しかし、第二期も末になると、次のような注意すべき用例が出てくる。

○「これなふこゝに」とにしきのふくろ。明んとすれば、「ヤア明ケまい〳〵。まん一其りんしたかうぢついとうのうすずみれば。此ばでやられずゆるされず。あけずとやつぱり其まゝ〳〵」（並木宗輔『狭夜衣鴛鴦剣翅』元文四〈一七三九〉年『新古典大系』223・5）

「ヤッパリ」が「そのまま」と重ねて用いられていて、「そのまま」である状態に対する話し手の予想や期待の意を含むようになった例とも解することができる。

第三期（宝暦から寛政頃〈一七五一～一八〇一〉）には、客観的状態を表す「ヤハリ」とともに、話し手の主観を表す「ヤハリ」も見られるようになる。

○▲楽天　イヱ〳〵心中ではござりませぬ美生トいふ男が。近所の娘と漑流ノ橋にて出合約束いたしまして橋のうへで待ていました所になにが此中の大白雨でにわか水が出て来たに爰をさつては心中が立ぬといふてやつはり橋のうへにいたげにござります（『聖遊廓』宝暦七〈一七五七〉年『洒落本大成』二330下12）

は、橋の上で女と待ち合わせの約束をしていた男が、にわか水が出て危険になったにもかかわらず「そのまま橋の上にいた」という意である。このような例がある一方で、同書には、次のような例がある。

○▲主李白　折ふし此方に酢をきらしましたゆへとなりへもらいにやりましたが酢かきゝますれはよふござりますが

▲孔子　やはり鯉はこくせうがよいに此酢はきぶひ酢しや（329上15）

「鯉料理には、一般に期待される通り、濃い酢がよい」というのである。

『月花余情』（宝暦七〈一七五七〉年）には、古い意味と新しい意味との両方が見られる。

○〔くめ〕ナアニをつしやるやら。そんなわる口をつしやると。つげるぞへ。〔客〕大事ござらぬ。日がらのへんがへするよりましでござろ。〔とよ〕又やつはりわる口じやわいなサア一ツあがれ（『洒落本大成』三109下10）

○〔中居くはしや〕…。すってん〳〵。ヤア喜八髪高ふゆふたな。大分能イ男じやといふて。あたまをちよつとた、く。〔料理人喜八〕ハア是はいたもとじや。〔客〕やつはり我商売で。口あい。やりおつたと。いひ〳〵。奥へ行。こたつにもたれ状よむ。（同109上14）

前例は予想通り悪口を言っているという意味であるが、後例は料理人喜八の「いたもと」という発言に対して、料理人だから予想通りその商売に引っ掛けた語呂合わせを言ったというのである。『虎寛本狂言』（寛政四年〈一七九二〉年写）にも新しい意味の「ヤハリ」が見られる。

○（シテ）扨どこに付て吸はするぞ。（アド）やはり先祖のおほぢの通り拇のはらに付て吸はせう。（かうやくねり『岩波文庫本』下235）

第三期には、江戸語で書かれた洒落本でも「ヤハリ」の意味は転じている。

○そうこう。いふうちに是は。衣紋坂。やつぱり。こゝは古風にこゝで。ずいぶん。衣紋を。つくろうがゑい。（『遊子方言』明和七〈一七七〇〉年『洒落本大成』四354下2）

○〔酔〕ナントモウかふ風が身にしんでは朝帰りは大かたカゴであらふなア〔カコ〕イエモウ旦那衆が勘定高ふて寒の内でもヤツパリ堀リの方が多ふござります（『南江駅話』明和七〈一七七〇〉年『洒落本大成』五71上13）

○まづざつとした所がこのくらいの物。まづ船頭でさへ。此通リに客をそまつにする。まして其船頭のつれて行所なら。やつはり其茶やも其通り。（『遊里の花』明和八〈一七七一〉年『洒落本大成』五230上3）

○〔わる口組曰〕是頭取殿さきから。きけばむせふにおれをおさきにするが。どら程。こふしやで。おれにいけんたて。其くらいの事は。おれもしつている。こゝな頭取のどろぼう野郎め〔頭取いわく〕それ〳〵。やはり其よ

ふに。御意なさるが野ぼの印其様な。いさこざで女郎を。お買なさるゆへ。いつでも。ちやにされます（同236下12）

『遊子方言』の例は、通人が若い男を伴って深川の色街に出かける途中、衣紋坂にかかった時の発言で、ここの坂では一般のやり方として衣紋をつくろうのであるが、その通りにここで衣紋をつくろおうというのである。

第四期（文化以降〈一八〇四～一八六七〉）には意味変化が完了していたと考えられる。

○そいつを読本などにも誤つて礼をいふ事と思って、お礼申すといふ所へいやをまうしてなどゝつかつてあるから、やつぱり能事と思つて誤伝へるのよ。（『浮世床』文化十～十一〈一八一三～一八一四〉年『日本古典全集』287・12）

○長「さうさ〳〵鼠と号よう　短「イヤ〳〵鼠も猫にはかなはねへ　長「ム、なるほど鼠より猫がつよい　短「そんなら苦労する事はねへ　長「なぜ　短「やつぱり猫と呼ぶがいゝ（同右300・11）

○「…私なども見ておられませんからやはりお店の方のお手つだひをいたしてネ、おまへさん、銭湯へ参る間もございません。…」（同右366・2）

○鳥「いよ〳〵なけりァおれと色になるか。そりやァ否だろふ。またなつては言かはした人に済めへ　たみ「アレマアやつぱり左様思召ますか。貴君に左様思はれますくらゐなら、殺されましてもかまひませんト少し涙ぐむ。（為永春水『春告鳥』天保七～八〈一八三六～七〉年『日本古典全集』411・11）

六、おわりに

「ヤハリ」とその語源と考えられる「ヤヲラ」との関係について、意味上の類似性は早くから指摘されてきたが、語形上の関連性については明確な説明がなかった。本稿は、それについての一つの試案である。

「ヤハリ」の意味は、室町時代に於いては《もとの状態のままであるさま》という客観的な状態を修飾する副詞であったが、江戸の第二期から第三期にかけての時期に現代語の意味を有するようになったと見られる。この意味変化は、「も

との状態のままである」という表現の背後に存する「変わることが予想あるいは期待されるにもかかわらず、もとのままである」という話し手の主観的感情が意味の中核に移ったものである。客観的な状態を表すものから話し手の主観を表すようになる副詞として、浜田敦氏は「やうやう」の場合を指摘しておられるが、[12]「ヤハリ」もまたそのような意味変化を遂げた副詞の一つに挙げられる。

注

(1) 「今昔物語集の〈和ラ〉とその周辺語」(『文芸研究』57　昭和42・11)

(2) 「ヤヲラ」に関して本稿で調査した文献は次の通りである。『大和物語』『落窪物語』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語(大成本)』『紫式部日記』『讃岐典侍日記』『打聞集』『発心集』『大鏡』『浜松中納言物語』『とりかへばや物語』『堤中納言物語』『閑居友』『古本説話集』『宇治拾遺集』『十訓抄』『解脱門義聴集記』『延慶本平家物語』『土井本太平記』『天草版平家物語』。

(3) 『日本国語大辞典』の「やわら」の項には、

「このたち給へるかたにいとしのびていりぬるに、あやしくて、やをらしりにたちていり給ぬるを、いかでかしらん、よべのなかのとをやわらあくればささざりけるも心ときめきせられていりぬるに」(「あさぢが露」)

の例を挙げ、補注で、

「あさぢが露」の例文には「やをら」と「やはら」両語が見られ、前者は人の体自体を動かすさまにいい、後者は他にはたらきかけるさまにいって区別したものか。

と説いている。

(4) 本稿で取り上げた抄物の底本は次の通りである。『百丈清規抄』は『続抄物資料集成』、『史料本人天眼目抄』は『抄物大系』、『京大本湯山聯句抄』『京大本周易抄』は『京都大学国語国文学資料叢書』、『土井本周易抄』は鈴木博氏『周易抄の国語学的研究』(影印篇)、『四河入海』は『抄物資料集成』、『禅林類聚撮要抄』は『禅門抄物叢刊』、『碧巌集抄〈伝万安抄〉』『無刊記碧岩鈔』は『抄物小系』、『史記抄(京大本)』『碧巌集抄〈川僧抄〉』『東大国語研究室蔵医方大成論抄』は紙焼写真あるいは原

本調査による。

(5) 鈴木博氏『周易抄の国語学的研究』の影印篇索引の例数による。

(6) 『抄物資料集成』の要語索引に挙げられている例数。

(7) 出雲朝子氏『玉塵抄を中心とした室町時代語の研究』の指摘によっている。

(8) 「ツ」は右傍に補入されていて、天文四年の書写の際に補われた可能性もある。

(9) 『土井本周易抄』に次の例もある。両足院本に「狩ハ」、成簀堂本「カリハ」とあるところから、鈴木氏(前掲書)は「カリ(狩)ハ」の誤写と推定しておられる。

○カリバカリテナウテ、征伐ノ法ヲナラハス、ヤハリ征伐ノ法ヲナラス者ノゾ(361・11)

(10) 鈴木博「『医方大成論抄』の二写本間の言語の違いについて」(『室町時代語の研究』所収)

(11) 拙稿「敬語『おすなる』と洞門抄物」(『福岡教育大学紀要』第一分冊27号 昭和53・2)

(12) 「『やうやう』から『やっと』へ」(『人文研究』四ノ六 昭和28・6)